

さむらい山脈

山手樹一郎長編時代小説全集 77

春陽堂



さむらい山脈

山手樹一郎長編時代小説全集

77

春陽堂

山手樹一郎長編時代小説全集 77

さむらい山脈

発行 一九八五年一月一〇日

著者 山手樹一郎 ©

装画 国貞(静嘉堂文庫提供)

装丁 玉井ヒロテル

発行者 和田欣之介

発行所 株式会社春陽堂書店

東京都中央区日本橋三丁目四一・一六

☎一〇三 ☎東京二七一〇〇五一 振替東京〇一・一六二七

印刷製本 城北印刷製本センター

◆ 定価はカバーに表示してあります
乱丁本・落丁本はおとりかえします

さむらい山脈

街 おぼろ

1

鶴田^{つるた}礼三郎^{れいざうろう}は深川万年橋の上に立つて、ぼんやり川下のほうをながめていた。春の夕暮れどきで、まもなく小名木川は暮色にかすみはじめの時刻である。

——弱ったなあ。

礼三郎は我にもなくため息が出る。左手の川つぶちの二軒目が丹波^{たんば}亀山^{かめやま}家五万石の下屋敷で、ここに先君の若い後室お茂の方がひっそりと暮らしている。

当主伊勢^せ守忠^{もりただ}之は先君の実弟で、三年前に病身だった兄忠光^{ただみつ}が病死したので家督をついだのだが、兄嫁お茂さまはすぐれた美貌^{ひびよう}の持ち主だ

だったので、これに執心して、里方へかえすことを承知しなかった。

そして、今日突然、礼三郎にいいつけたのである。

「お茂さまも兄の喪はもう無事にすんだはずだ。明日遠乗りの帰りに立ちよるから、その旨しかと耳にいれてきてくれ」

このしかとという言葉がくせもので、おとなしくわが意にしたがえという心なのである。当主には正室があるので、下世話にいう兄のあとへなおるといふわけにはいかない。だからといって、仮にも兄嫁なのだから、公然と側室にするわけにもいかない。つまり、かくし妻にしようという腹なのだ。

お茂さまはまだ二十を出たばかりの若さだから、ぜひ里方へもどりたい気持ちがある上に、聡明^{そうめい}で行儀の正しい性格なので、いかに礼三郎がのんびり屋で度胸のいいほうでも、この使者だけはつとめかねるのである。

しかも、悪いことには、礼三郎は家老の家に生まれ、母のお京の方は当主兄弟の實の叔母に
あたるから、当主たちとは従弟同土になるのだ。
「お母さん、しようがないからわしは当分浪人
することにします」

一ノ橋外の上屋敷を出る時、礼三郎はひそかに母にだけわけを話して、そう決心を告げた。

「浪人は結構ですけれど、ただそれだけでいいでしょうかねえ」

「なるほど——」

「男というものは、自分だけがいい子になったではすまないことがあると思います」

「わかりました。なんとか考えてみましょう」

母はお茂さまを救えというのだ。たしかにこれは正論だが、これを実行するとなると大きな困難がある。だいいち、事は明日にせまっているのだ。

——どうも弱ったなあ。

礼三郎はもう一度大きなため息をついた。

「だんな、短氣をおこしちやいけやせんぜ」

ふいにうしろから声をかけてきた者がある。縞の対を着た三十がらみの男で、堅氣にしてはどこかくずれたところがあるようだ。

「だれが短氣をおこすんだね」

「あれえ、間違ったかな。その様子じゃ身投げつて顔じゃありやせんね」

平凡な顔がにやりとわらつてみせる。

「なるほど、わしはため息をついていたようだな」

「しかも、大きなやつを二つばかりね」

「なんだ、おまえさっきからわしを見ていたのか」

「見ていやしたよ。どこかでたしかに見た顔だと思ひやしてね」

油断のできないことをいう男だ。

「だんなは、もしや、一ツ橋外に上屋敷のある

亀山家の御家老、鶴田大学さまの若だんなじゃ
ありやせんか」

その男はびたりとこっちの図星をついてく
る。

「わしはその鶴田礼三郎だが、おまえはだれな
んだね」

こっちはまったく見おぼえない顔なのであ
る。

「あっしは鎌吉（うまさき）といいやしてね、実はついこの
間までお上屋敷の大部屋にごろごろしていた奴（やつ）
なんです」

「ふうむ、人足部屋の折助だったのか」

大部屋の折助には渡り者が多く、いつも出入
りが激しいから、いちいち顔などはおぼえてい
られない。

「ああ、わかった。わかりやしたよ、若だんな」

「なにがわかったんだ」

「若だんなはあそこのお下屋敷をながめていた
んですね」

「そのとおりだ」

「あそこには若くてお美しい御後室さまがすん
でいらっしゃる。若だんなはそのお腰元さまか
なんかに会いたいんですね」

「うむ」

「そんならなにもため息なんかついていない
で、若だんなは御家老さまの息子なんだから、
大手を振って入っていけばいいじゃありません
か」

「そうはいかぬ。わしは今日親どもから勘当さ
れてきたんだ」

「なんですって——」

鎌吉はちょいとあきれたような顔つきだっ
た。

「若だんなが勘当だなんて、本当かなあ」

「本当だ」

「そうか、若だんなはそのお腰元さまに文をつ
けたんですね。それがばれたんで、見せしめの
ため勘当ということになった。そいつは少ししま

ずかったなあ。ようござんす。あっしはまだあ
そのの門番に顔がきく。いくらかつかませて、
そのお腰元さまを呼び出す段取りをつけてきて
あげやしょうか」

「おまえ、そんなに顔がきくのか」

これは耳よりの話だと思つた。

「あっしはしばらくあそこの部屋にもいたこと
があるんでさ」

「お茂の方さま付きの老女で玉浦さまというの
がいる。知っているか」

「知つていやすよ。お里方からついてきたお女
中で、あっしは口などきいたことはありやせん
が、一度お駕籠かごをかついだことがありやしてね」

「ここで立ち話はまずい。こっちへきてくれ」

橋を渡りきつた大工町のほうに棧橋きんばしがある。

礼三郎はそこへ鎌吉をつれていく。ここならだ
れに立ち聞きをされる心配もない。

「若だんな、まさか玉浦さんに文をつけたわけ
じゃないんでしょね」

「どうしてだね」

「あれはしつかり者だから、へたなまねをする
とひっぱたかれる。もつとも、ああいうしつか
りものは、一度ほれたとなると、それこそ命が
けになるもんですがね」

「おまえ、女にはなかなかわしいようだな」

「ひやかしっこなしさ。けど、あっしはこう見
えても、女ではさんざ苦勞してきましたからね
え」

鎌吉はわざととぼけたような顔をしてみせな
がら、どこに本心があるのかわからないような
男だ。

3

「わしはなあ、鎌吉、ぜひ今夜中にその玉浦さ
まにそつと会いたいんだが、なんとかならんも
のかなあ」

礼三郎は正直に切り出してみた。

「本当かね、若だんな」

「本当だ。だめかね」

「だめってこともねえでしようが、あの玉浦さまにはお側御用人そばごようじんの黒崎重四郎くろさきしゅうしろうさんの目が光っている。知っていやすか」

側用人黒崎重四郎は江戸藩邸に黒崎党をつくり、一手に藩政をおさえている才物である。彼は金策にふしぎな手腕があつて、何度も藩の財政を救っているので、多少目にあまることはあつても、だれも彼の頭をおさえることができずにいる。

「そうか、玉浦は重四郎にねらわれているのか」
「そうですよ。お上屋敷の御老女清島さまとおなじで、玉浦さまさえおさえてしまえば若い御後室さまはもうどうすることもできませんからね」

「はてな、お茂さまがほしいのは御当主さまじやないのか」

「ですから、若後家さまを殿さまのいけにえにさしあげておいて、黒の字はなにか一仕事たく

らんでいる、もっぱらそんなうわさですぜ」

鎌吉は藩の内情を相当くわしく知っているようだ。これは油断ができない。

「おっと、若だんな、いきなりお手討ちはいけやせんぜ。あつしを切つて損をするのは若だんなのほうですからね」

そんなずぶといことをいって、平気でにやりとわらつてみせる。

「おどろいたなあ。おまえはまるで隠密おんみつのようなことをいう」

「御冗談で——。あつしはそんなけちな男じゃござんせん。こう見えても天下のさがし屋というのがあつしの稼業かせぎなんです」

「天下のさがし屋というと——」

「どろぼうのかくしておいた小判をさがしているんです」

「わしにはよくわからぬ」

「いまにわかりまき。それよりどうです、若だんなはおれを味方にするか、それとも敵にする

か、どっちにしやす」

鎌吉はずばりと勝負に出てきたようだ。

「正直にいうと、わしはいま一人で困っているんだ。ぜひ味方になってもらいたいな」

「すなおだねえ、若だんなは。ようござんす、当分家来になってあげやすから、本当のことを話してごらんなさい。あつしにできることなら、なんでも相談のりやすぜ」

「わしは今夜中にどうしても玉浦に会わなければならんだ」

「ただ会えばいいんですか。つれて逃げようつてわけじゃないんですね」

「いや、つれて逃げたいのはむしろお茂さまのほうなんだ」

「へええ、御後室さまのほうをねえ。そいつは大変だ。一体、どこへつれて逃げようつていうんです」

「それはまだきまっていない。しかし、ともかくも今夜中になんとかしないと、明日は御当主

が押しかけてくる」

「なるほどねえ。話はどうやらのみこめてきたが、こいつうまくいくかな」

さすがの鎌吉もちよいと考えこんでしまったようだ。

4

「若だんな、あのお下屋敷の中にだれかこっちの味方になってくれるような人はいないんですよかねえ」

鎌吉があらためて聞いてきた。

「いないこともない。あそこの用人寺島孫右衛門は、お茂さまのお里方から付き人としてつてきた老人だ。——老人ではだめか」

「とんでもない。そいつは好都合だ。そういう人なら、お茂さまのためにきつとひとはだぬいでくれるでしょうからね」

「老人をどうしようつていうんだね」

「若だんなをお茂さまのところへ手引きしても

らうんでさ」

「なるほど——」

「その段取りはあつしがつけるとして、若旦那はお里方のお下屋敷がどこにあるか知つていやすか」

「たしか、本所業平橋なりひらなせしのそばに一軒あるはずだ」

「業平橋なら船が使える。これで話はきまった。あつしはこれから御用人さまに会つて、なんとか段取りをつけてきやすから、若旦那は一足先に中ノ橋のそばの上総屋かすさやという船宿へ行つて待つていておくんなさい」

「上総屋という船宿だな」

「そうです。伊勢屋いせやという大きな質屋の前だから、すぐわかりやす。ああ、そうだ。屋根船を一艘いっそうたのんでおいてください」

「新顔が一人で行つても大丈夫か」

あまり世間なれない礼三郎は、ちよいとそれが気になる。

「たぶんおせきという氣つぷのいいあねごがい

るはずですから、あつしの名をいつてもらえば新顔でも大丈夫でさ」

鎌吉はそういいすてて、もうさっさと棧橋から往来へあがつていく。あたりはいつかたそがれかけていた。

——あの男は一人でのみこんでいるようだが、うまくいくかなあ。

なにかたよりない氣がしなくてもなかったが、そんなことを氣にしているのは限りがない。だいいち、氏も素姓もわからない初対面の男なのだ。ともかくも一応頭から信用して、鎌吉のいうなりに動いてみるほかはないのである。

上総屋という船宿は、中ノ橋をわたつた右手に掛け行燈あんどんが出ているのですぐわかった。なるほど、その前がわは伊勢屋という大きな質屋だった。

油障子をあけて店の土間へ入つていくと、
「おいでなさいまし」

店座敷の炉端にいたおかみが気軽に立つてき

て出迎える。顔こそ日焼けはしているが、まだ三十前のきりつとした女ぶりで、きかなそうな目つきをしている。

「あんたはおせきさんというあねごか」

「あねごだなんて、恐れ入ります」

「鎌吉という男を知っているかね」

「あなたさまはどなたさまでござんしょう」

ちらっと用心深そうな目になる。

「わしは鶴田礼三郎という浪人者だが、鎌吉がここで待っているようにというんで、いまそこで別れてきたんだ」

「それなら、どうそおあがりくださいまし。なにか船の御用でござんすか」

「うむ、屋根船をたのんでおけといわれている」
これで用件はすらすらとすんでしまったことになる。

5

「鶴田さまは鎌吉とどういいうお付き合いなんで

しょう」

礼三郎が土間からあがって炉端へ座ると、おせきはさっそく茶をいれてくれながらそんなことを聞く。なにかをさぐり出そうとするような目つきだ。

「友だち付き合いだと思ってもらえばいい」

「屋根船を出すのだそうですね」

「うむ」

「お遊びですね。辰巳つみかしら、それとも柳橋あたり」

「いや、本所のほうだ」

「あら、本所にそんな岡場所おかばしよがあったかしら」
おせきは目でわらっている。

「わしはよく知らないんだ」

「余計なことですけど、鎌吉などとあんまりお友だち付き合いをしないほうがいいんじゃないやありませんかしら」

「どうしてだね」

「あの人は根は悪人なんていう柄じゃないんで

すけど、あのとおりでくさつぽくて、道楽者で、どこか奥底の知れないようなところがあるんです。鶴田さまはお見うけしたところ育ちがよさそうだし、朱にまじわればなんとやらで、どうせろくなことはないと思うんですがねえ」
おせきははっきりとそんな無遠慮な口をきく。

「あねごは鎌吉ともう古い付き合ひなのか」

「さあ、四、五年ぐらひになるかしら」

「わしはあねごがいうほどそう育ちはよくないんだ。だから、今夜ある屋敷の女をさらって逃げようと思って、いま鎌吉に下見をしに行つてもらっているんだ」

「なんですつて——」

さすがにちょいとあきれたらしく、まじまじとこっちの顔を見ながら、

「ああ、わかった。そのお屋敷に好いて好かれた娘さんがいる。親御さんたちがどうしてもゆるしてくれないんで、今夜黙つてつれ出して逃

げようというんですね」

と、うまいことをいう。

「まあその辺のところかな」

「罪ですわねえ。男はいいけれど、そんな危ない橋をわたつて、その娘さんこれから苦労するんじゃないかしら」

「そうか——。そういえばたしかに危ない橋ということになるな」

「またなんの因果か、あの人ときたらそういうことは黙つて見ていられない性分でしてね、困つちまうんです。武家屋敷は一つ間違えば命がないというのに、大丈夫でしょうかねえ」

「なんだ、そんな心配をするところを見ると、あねごは鎌吉とただの仲ではないんだな」

礼三郎はやつとそこへ気がつく。

「ふ、ふ、悪縁なんだからしやうがありません。どうせあたしは地獄へおちる女なんです」

おせきは度胸をすえたように、年増盛りの体中に情熱がたぎってくるのを、もうかくそうと

はしなかった。

「鎌吉はよっぽどのみになる男とみえるね」

「さあ、どうなんでしょう。女に心配ばかりかける男が、そんなにたよになるかしら」

「どうやらこれはおせきのほうが熱が高いようだ。それにしても、こういう世間なれた女を夢中にさせるような男なら、まず信用しても大丈夫だろうと礼三郎は思った。

6

鎌吉は宵の口をすぎるところ下屋敷からもどってきた。

「今晚は、あねご。まだごやかになりやす」
さつさと炉端へあがつてきながら、口ではそんな神妙なあいさつをする。

「いやだよ、ばかばかしい」

おせきは照れたように一つにらんでおいてから、

「それで、こちらさまの御用は足りたの」

と、たたみかけて聞く。

「あれえ、若だんなはそんな御用の話までしちまったんですか」

「うむ、ざっとな」

「いけねえなあ。このあねごだからいいようなものの、口はなるべく堅くしなけりゃいけやせん」

「いや、あねごはおまえとただの仲ではなさそうだから、話しておいたほうがいいと思ってな」

「なあんだ、あねごのほうからのろけたのか」

「そうじゃない。おまえの体をひどく心配するんで、気の毒になったんだ」

「すみません。このあねごとくると、少し情が深すぎるもんだから」

「もういいっていうのに、恥ずかしいじゃないか」

礼三郎は黙って二人の顔を見くらべているのはなかった。

「おっと、いけねえ。——若だんな、どうやら

もうお下屋敷のほうへも敵の手がまわっている
ようですぜ」

鎌吉は急に真顔になる。

「そうか——。わしもたぶんそんなことだろう
と思っていた」

「なんでも、夕方、お上屋敷から岡野^{おかの}三九郎と
かいり人が乗りこんできて、御用人さまに明日
の御当主さま遠乗りのことを申し入れ、若だん
ながみえたら取りおさえておくようにというこ
とで、今夜は泊まりこんでいるようです」

岡野三九郎は近習仲間でも才気走っているほ
うで、人望はないが、こういう時には役に立つ
男だった。

「それで、御用人にうまく会えたのか」

「会えやしたよ。実はこれこれだと正直にぶち
まけやすとね、御用人さまは当惑したような顔
つきで、とにかく若だんなに会ってみよう、五
ツ（八時）をすぎたら水門口のほうをあけてお
くから、そっちから船で若だんなをつれてきて

くれということでした」

「三九郎は今夜なにか手くばりをしているよう
か」

「そいつははっきりしやせんが、御用人さまが
そういうんですから、水門口のほうだけは丈
夫なんだらうと思ひやす」

「そうか——。とにかくそう信じて乗りこんで
みるよりしようがないな」

「あねご、屋根船は用意しておいてくれたんだ
ろうな」

鎌吉はおせきのほうへ聞く。

「用意しておいたわ。鎌さんも行くの」

「行くとも——。船はおれがこいでいく。一つ
間違えば命のない仕事に、なんの縁もない船頭
を使うのは罪だからな」

「いいわ、それならあたしもいっしょに行く」

「おまえがか——？」

「船ぐらいあたしだってこげます。これでも船
頭の娘なんだもの」

おせきはきっぱりとわらってみせる。

7

「若だんなが無断で家出をしたとなると、脱藩の罪をしようされてもしょうがないことになりはしませんか」

おせきが船の支度（しど）に座を立った後で、ふいに鎌吉（かまきち）がそんなことをいい出す。

「まあ、そういうことになるだろうな」

脱藩（だつはん）は重罪（じゅうざい）のうちに入るのである。

「もしそうだったとして、親御（おやご）さんたちのほうへおとがめはいかないもんでしょかね」

「それはいくだろう。それでなくてさえ、側用人（わきづりやく）の黒崎（くろさき）がいちばん煙（え）たいのは、うちのおやじさまの目（め）だらうからな」

「そんなに落ち着（おちづ）いていて大丈夫（だいじゆう）なんですか、若（わ）だんな。黒崎重四郎（くろさきしゅうしろう）ってのは、相当（さうたう）あくどい男（おとこ）だって話（わ）ですぜ」

こっちが少しも心配（しんぱい）するような顔（かお）を見（み）せないの

で、鎌吉（かまきち）は内心（うちしん）いささかあきれているようだ。

「あれは勘定方（くわんぎやう）黒崎（くろさき）武太夫（ぶたゆう）の腹（はら）違い（ちがひ）の弟（あに）だとかで、五年（ごねん）ばかり前に武太夫（ぶたゆう）が病死（びやうし）するとすぐ、その跡（あと）へなおった男（おとこ）だ」

「その話（わ）ならあつしも聞いていやす。なんても武太夫（ぶたゆう）さんはだいふお家の御用金（ごようきん）をつかいこんでいた。重四郎（しゅうしろう）はそのしりぬぐいをして入夫（いふ）したんだそうですが、実はその前から御新造（ごしんぞう）とできていた。つまり、武太夫（ぶたゆう）さんは重四郎（しゅうしろう）にも借金（がきん）があつて、御新造（ごしんぞう）はあの男（おとこ）から逃（に）げることができなかつたんだらうって話（わ）なんですがねえ」

「ふうむ、それは初耳（はつみみ）だが、とにかくあれは金をこしらえる名人（めいじん）だから側用人（わきづりやく）にまで出世（しゅっし）したんだ」

「なにをたくらむかわからない男（おとこ）、そんな気（き）はしませんか」

「そういえばそうだな」

「だから、あつしは御家老（ごけらう）さまのことが氣（き）になるんでき」

「それは大丈夫だ。おやしきまはつかみどころのない人間にできているから、重四郎もあつかにくいだろう」

「そんなもんですかねえ」

そこへおせきが船の支度ができたといつてきたので、三人は裏口から棧橋へ出ていった。そこに屋根船がつないであつて、おせきの弟の新蔵が立って待っていた。

「兄貴、今夜はおめえが船頭なんだつてね」

若い新蔵は物好きだなといったけな顔つきである。

「まあ見ていくんな」

鎌吉は羽織をぬいでおせきにわたし、しりつぱしりになつて艫のほうへ行つて立つ。

「新蔵、留守番をたのむよ」

礼三郎の後から船へ移つたおせきがいうと、
「わかつてらあね。うれしそうだなあ、姉さん」

と、新蔵は姉をひやかしながら手早くもやいを解いて、船を押し出してくれる。

「なまいってるわ」

おせきがだれにともなくつぶやいているうちに、船はゆらりと棧橋をはなれて、鎌吉が艫をつかい出す。なるほど、慣れた手つきだった。

もう月の出のおそいころで、空には春の星がうるんでいた。

船房の灯はわざと消してあつた。

「若旦那、うまくいったら今夜この船でいいひとをつれて逃げるんですか」

船房へ落ち着いてから、おせきがわらいながら聞く。つれて逃げるのは大名の若い御後室さまだとは、まだまったく考えてもみないおせきのようだ。

8

「あねご、こんな危ない仕事にあんたまでまきこんでしまつて、あいすまん」

礼三郎はやみにうすぼんやり浮かんでいるおせきの顔のほうへいって、我にもなく頭をさげ